

土器の器種と胎土

清水芳裕

1 はじめに

土器、石器、木器はいずれをとっても道具としての機能と材質の相互に深い関係をもっている。しかし土器研究においては、石器や木器と比較して材質への関心ははられない傾向が強い。その理由として、第1に、土器は材質自体強い共通性をもち、さらに焼成変化が加わったものであるために、個々に特徴を導き出すことが難しいこと、第2に、ある特殊な地域を除いてほとんどどこでも外観上ほぼ同質の土器を製作することができること、第3に、時間軸、空間軸としての年代や地域の特徴という考古学の主要な問題は、形態、文様、調整といった要素の型式学的研究からきわめて有効な情報が得られること、などがあげられよう。しかし土器の発生以後の長い歴史をとおしてみると、材料の選択は徐々にではあるが変化していることを誰でも目にすることができる。また世界各地の土器製作の民俗例は、その一部を具体的に示すものである。これについては佐原真氏の詳細な調査研究があり、これを参照されたい。⁽¹⁾ 加えて最近西田泰民氏によってもいくつかの紹介がなされている。⁽²⁾

日本では土器製作における材料の選択が、いつごろどのような意図のもとになされてきたのであろうか。土師器については、従来から胎土が精良な一部の土器に水簸の可能性が指摘されるなど、縄文・弥生土器とは材質の上で大きく異なっていることも論じられてきている。⁽³⁾ 縄文土器から土師器に至る土器の材質がどのように変化し、その変化は何によっているのかを胎土の精粗から分析すると、全体的に緻密な胎土へと変化するものではなく、緻密な胎土と粗放なものが徐々に分化していくこと、つまり土器の材質の選択がすすむことがわかる。それは用途に関係する器種と、製作技術と関係する器形の大小とに主要な要素が求められるようである。この点を縄文土器から土師器へのいくつかの時期の土器について検証してみることにする。

土器の材質と関連して、精製土器と粗製土器の用語がしばしば用いられる。とくに縄文土器、弥生土器では、施文や調整の精粗という製作技術の要素から区分する立場と、胎土の精粗をも重要な要素として加えて区分する立場とがあり、あいまいな概念のままに使用されている。西田氏は胎土の精粗の差を識別する分析をおこなったが、その前提として明

らかに前者の内容で土器の区分をし、縄文後期の土器を精製土器と粗製土器の2種に分けて、それらの胎土の砂、シルト、粘土の含有率の比較をする方法をとった。⁽⁴⁾佐原氏は、胎土の精粗を独自の要素として、「緻密」と「粗俵」という用語を設けて説明する。⁽⁵⁾

土器の素地の選択を識別する要素としては、さまざまな項目が想定されるであろうが、まず、胎土の緻密か粗俵かを区分し、それがどのような要素と関係するかをみていくのが現実的であろう。最近発掘調査報告書には、胎土の状態を記載するものが多くなってきた。こうした観察は、緻密と粗俵の区分の基準が示されていれば、土器製作技術の一要素として有用な情報となる。しかし一般に器面か断面の肉眼観察によるものであるために、器面に丁寧な磨きや撫でが施されたものでは砂粒が沈み、緻密であるかのように見えたり、断面観察では、それが小面積であるために判別しにくいものもある。図30は、京都市北白川追分町遺跡で出土した、縄文晩期の土器の器面の状態と胎土の組成とを比較したものである。左は丁寧な撫でが施されているのに対して、右は器面調整がきわめて粗い土器である。肉眼観察から両者の胎土を比較すると、左は緻密で右は粗俵、と判断するであろう。ところが砂の含有量を後述する基準によって0.3 mm以上の砂によって測定すると、左が15.6%であり右が15.9%と、ほとんど同じ胎土である。右の土器に大粒径の砂がとくに多いわけでもなく、顕微鏡で観察する限りにおいては、むしろ左の土器の方が全体的な組成が粗く緻密さに欠けるようにもみえる。器面の観察だけでは胎土の精粗が判別しにくいものがあることが、この一例によってもわかる。

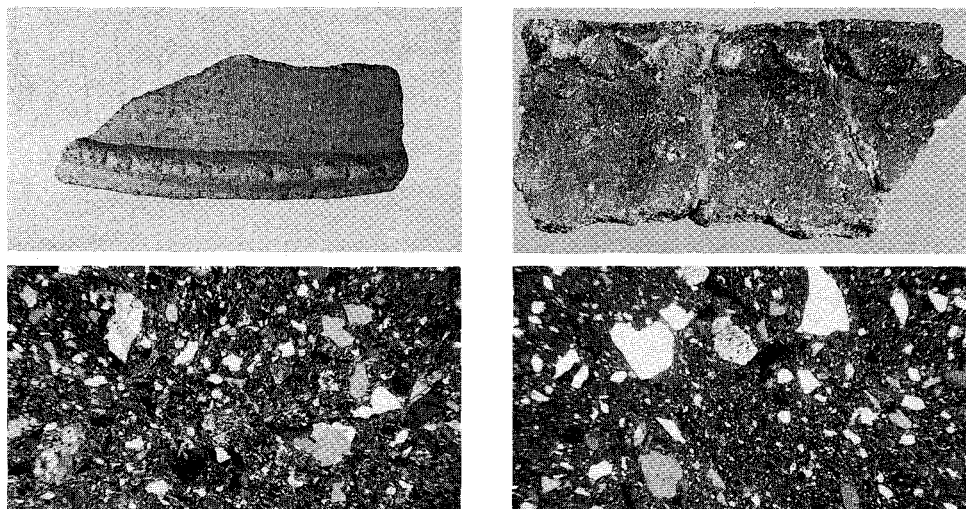


図30 調整による器面の差（上、1/2）と胎土組成（下、×10）北白川追分町遺跡縄文晩期の土器

素地選択の検証

土器の主要な材料である粘土とこれに加わる砂の比率は、多数の土器を個々にとり上げると連続的な差をもつに過ぎないことが、この種の分類の難しさを生み出している。したがって、土器製作時に素地の差を意図したことを把握しうる基準を設けて、土器の緻密さと粗放さの程度を区分することが必要である。そのためには、土器に加わる砂を少なくとも人為的に加えた可能性の高いものに限定してその含有率を測定し、機能や器形の大小と、あるいは時代とどのように関係して変化する傾向があるかをみることが有効であろう。

2 素地選択の検証

胎土の組成を砂、シルト、粘土の三成分からそれぞれ定量し、シルトと粘土、砂と粘土のそれぞれの比率を求めて比較する研究が平賀章三氏や、西田氏らによっておこなわれている。平賀氏は、奈良県桜井市纏向遺跡出土の土師器を分析し、型式学的要素によってあらかじめ分類された地域色にもとづく区分を参考に、大和系と河内系の2群を比較した。その結果として、大和系よりも河内系の方が粘土に対する砂の含有量が多く、粗い組成であることに注目し、産地の区分がこれによって識別できる可能性を示した。⁽⁶⁾しかし西田氏が指摘しているように、砂の含有率が高い河内系土器は、試料が甕に限られていたことから、胎土の違いは地域差だけでなく、器種による差という要素も加わっていることを考慮されるべきであろう。

西田氏は同様の方法で、千葉縣市原市祇園原貝塚出土の縄文後期加曽利 B2 式を中心とする時期の土器100点を分析した。そこでは文様の要素から精製土器と粗製土器の2群に区分し、その比較を行うことを主要な目的としている。結果として、精製土器の深鉢、鉢、碗と粗製土器の深鉢、壺との間では胎土の砂の占める割合にはほとんど差がなく、さらに精製土器に加わる砂の方に粒子の粗いものが多いという。また精製土器の中での器種による粒度の違いが明確でないことから、それは機能の差ではなく遺跡付近の地域的特徴を示しているのではないかと結論した。したがって、平賀氏の結果に対して器種の差ではないかという指摘をしているものの、その視点からの詳細な比較は示されておらず重要視していない。⁽⁷⁾

素地の差をどのような要素に求めるかはさまざまであろうが、緻密と粗放の差は、胎土に加わる砂、あるいは一部の他の材料の混在する量によって識別するのが一般的であろう。しかし実際には、両者をどのようなものさしで区分していくか、さらには区分された材質のどのようなまとまりが、機能あるいは製作技術上の要素と関係づけられるかについては、

十分検討されなければならない。この点が石器や木器における製品と材質の選択との関係にくらべて複雑である。土器は一般に粘土と砂の2つの要素しかもたないが、精良な粘土とある大きさ以上の砂という2種をそれぞれに採取して、これを混和するといった単純な図式はひけない。自然堆積物の多くには、粒径の上で連続的に変化する粘土、シルト、砂が混在している。土器胎土の性質を両端に分けると、一方は緻密な粘土が大部分で砂粒がみられないもの、他の一方は粘土とよぶべきものが少なく大粒の砂を多く含むもの、あるいは全体にシルト質のものである。しかし実際にはこれらの中間的なものが大部分である。緻密と粗俵という実体に則していながらさわめて感覚的な表現と、砂、シルト、粘土の含有率という数量とを結びつけることは難しく、かりに数量を測定してもどこからを緻密とよび、どこからを粗俵とよぶかとなると、それだけでは有効な意味をもたない。つまりそれは比較の問題にとどまっているからであり、そこには土器製作にあたってどのような製品を期待して素地の選択をしたかという、両者の関係を考慮に入れておく必要がある。

平賀氏と西田氏は、粘土、シルト、砂の3要素の量を忠実によみとることを目指している。これらの混合の仕方が精緻さと粗放さを生むことは疑う余地はなく、自然科学的な分析の視点と方法の上からは基本的な立場である。しかし、かりにシルトに近い粒径のものが多量に含まれる土器と、精緻な粘土に粗粒砂を含むものとを比較した場合、どちらを緻密あるいは粗俵とよぶかの区分は容易でない。問題は、土器としての機能や製作技術の面から、製作者がそれぞれの製品に適した材質を選択した意図をさぐることであり、このことを具体的な形で検証することが必要であろう。胎土の差は、含まれる砂の量に左右される面が強く、かつそれは土器に残された証拠として比較的把握しやすいことに注目し、素地の作成にあたって精良な粘土を選択したことが明瞭なものや、意図的に多量の砂を加えた可能性の高いものを区分するのが合理的である。したがって、ここでは胎土の緻密と粗俵を区分する分類作業に、最大公約数的な前提をおいた。具体的には、こうした区分の指標となるであろう砂、つまり比較的大きな粒径をもつ砂に限定して、その含有率から、個々の土器の緻密と粗俵の差をよみとることにした。

3 算 定 法

砂の含有率の測定には、土器のプレパラートを偏光顕微鏡で観察し、砂の量をプレパラート上に占める面積から割り出す方法をとった。胎土中に占める砂の面積点の集合として測定し、全測定点に対する比率を求めるものである。小粒径の砂やシルトは粘土堆積物の中

にも混在し、採取された材料に本来加わっていたものか、素地を作るさいに混和したものであるかの識別は難しい。しかしそれがかなり粒径の大きな砂に限ると、意図して加えたものであることの可能性が高まる。したがって、こうした砂粒の含有率をもって胎土の精粗の差を読みとることが有効であろうと判断し、その粒径の区分に、0.3 mm 以上という目安をおいた。その根拠は次の3点にある。①胎土に加える砂の効果が膨張、収縮の緩和や除粘あるいは装飾要素のいずれであれ、微細すぎるとその効果は小さく、意図して素地に混和した可能性は少ない。⁽⁸⁾②砂の定義は粒径 0.02~2 mm のものをいうが、0.1~0.2 mm 以下の小粒径の砂やシルトは、どのような土器にも例外なく含まれている。③混和材として多量に添加されたと考えられる角閃石などを測定すると、細片化したものも含まれるが、全体としては 0.3~0.5 mm 程度のものが多数を占め、1 mm を越えるものも少なくない。

こうした点から、意図して加えた砂であれば、0.3~0.5 mm 程度以上のものであろうと想定することができ、その幅を広く設けて 0.3 mm 以上のものに注目すれば、素地作成のさいに意図した砂の一部として、多数の土器の胎土を比較する上で共通した基準になるものといえる。もちろん土器製作においてこうした数値を意識してはいないが、加えられた砂であるにしろあるいはすでに加わっている堆積物を選択したにしろ、この程度の数値で区分すると、材質選択の意図が浮かび上がってくるものと考えている。したがってここで示す砂の含有量の比率は、胎土中の砂全体の量ではないが、少なくともこうした背景を導き出すために、個々の土器を一律に比較する最大公約数的な基準となる数値といえる。胎土中に含まれる砂は円形、楕円形あるいは不整多角形の、棒状、角状さまざまであり、0.3 mm の基準にしたがった測定法を一定にしておく必要がある。ここでは雲母など棒状や板状のものは、幅は 0.3 mm に満たないが長さは 1~2 mm にも達するものが胎土には

比較的多いことを考慮して、この種の鉱物は最大長 0.3 mm 以上のものをすべて算定の中に加えた。図31は、土器に加わる一定粒径以上の砂をプレパラート上で見たものを模式的に表現し、その量を求める上での測定点を加えたものである。⁽¹⁰⁾面積の上から含有量を算定する一法として、砂の部分とそれ以外の部分をそれぞれの点の合計として求める。測定点が多数であればそれだけ面積に近づく。ここでは1プレパラートについて1,000点を測定し面積としての量的計算をおこなった。

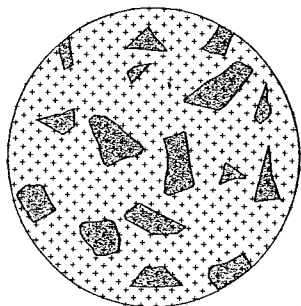


図31 砂含有率計算法。
(色指数20%の例)

4 縄文土器・弥生土器・土師器の胎土

以上のような手続きにもとづいて、縄文時代から古墳時代の土器の胎土をみていくと、個々の土器の砂の含有率は一見無秩序な値をとっているようであるが、器種、器形の大小によって大きく区分すると、土器の用途や製作技術と材質の精粗の関係について時代による変化を見出すことができる。この点をより厳密に導くためには、製作過程での素地の単位あるいは複数の器種の使用時における単位を個々に一群の試料として求めるのが理想的であるが、出土土器から素地の単位を識別することは難しいことや、できるだけ多数の土器から把えることが要求されるため、単一遺構での使用時の単位と認められる土器だけを扱うことは不可能に近い。したがって、ここで分析した3群の土器は、それぞれできるだけ時期幅の少ないものを選択し、さらに個々の群の土器は一遺跡出土土器に限定し、用いられた材質に地域的差が表われる要因などを排除した。その上で縄文土器、縄文晩期終末～弥生前期の土器、土師器をそれぞれの群として胎土の比較をおこなった。縄文土器では、千葉県佐倉市飯合作遺跡出土の後期を中心として一部晩期前葉の土器を、縄文晩期終末～弥生前期の土器は青森県是川中居遺跡出土のものを、また土師器は千葉県市原市番後

表3 縄文土器（千葉県佐倉市飯合作遺跡）

試料 番号	原典図 番号	時期	器種	砂含有 率(%)	試料 番号	原典図 番号	時期	器種	砂含有 率(%)
1	368	称名寺式	深鉢	9.3	20	387	〃	浅鉢	9.4
2	369	〃	〃	10.8	21	388	加曽利 B1 式	注口	5.4
3	370	〃	〃	13.6	22	389	〃	〃	5.9
4	371	〃	〃	13.4	23	390	加曽利 B2～B3 式	浅鉢	15.1
5	372	加曽利 B1 式	〃	8.0	24	391	加曽利 B2 式	深鉢	9.1
6	373	〃	〃	4.9	25	392	〃	〃	7.3
7	374	〃	鉢	5.8	26	393	加曽利 B3～曾谷式	〃	4.6
8	375	加曽利 B2 式	深鉢	14.9	27	394	〃	〃	11.3
9	376	〃	〃	14.8	28	395	〃	〃	13.5
10	377	〃	〃	11.0	29	396	安行 1 式	〃	10.2
11	378	〃	〃	11.0	30	397	安行 2 式	〃	7.4
12	379	加曽利 B2～B3 式	〃	7.4	31	398	〃	〃	7.7
13	380	加曽利 B1～B2 式	鉢	14.2	32	399	〃	〃	9.0
14	381	加曽利 B1 式	深鉢	14.3	33	400	安行 3a 式	浅鉢	7.7
15	382	〃	〃	18.1	34	405	安行 3b 式	深鉢	9.4
16	383	〃	〃	11.8	35	406	安行 2～3a 式	〃	15.3
17	384	〃	〃	5.7	36	401	安行 3a 式	浅鉢	5.3
18	385	加曽利 B2 式	浅鉢	15.2	37	402	〃	〃	11.3
19	386	〃	深鉢	16.3					

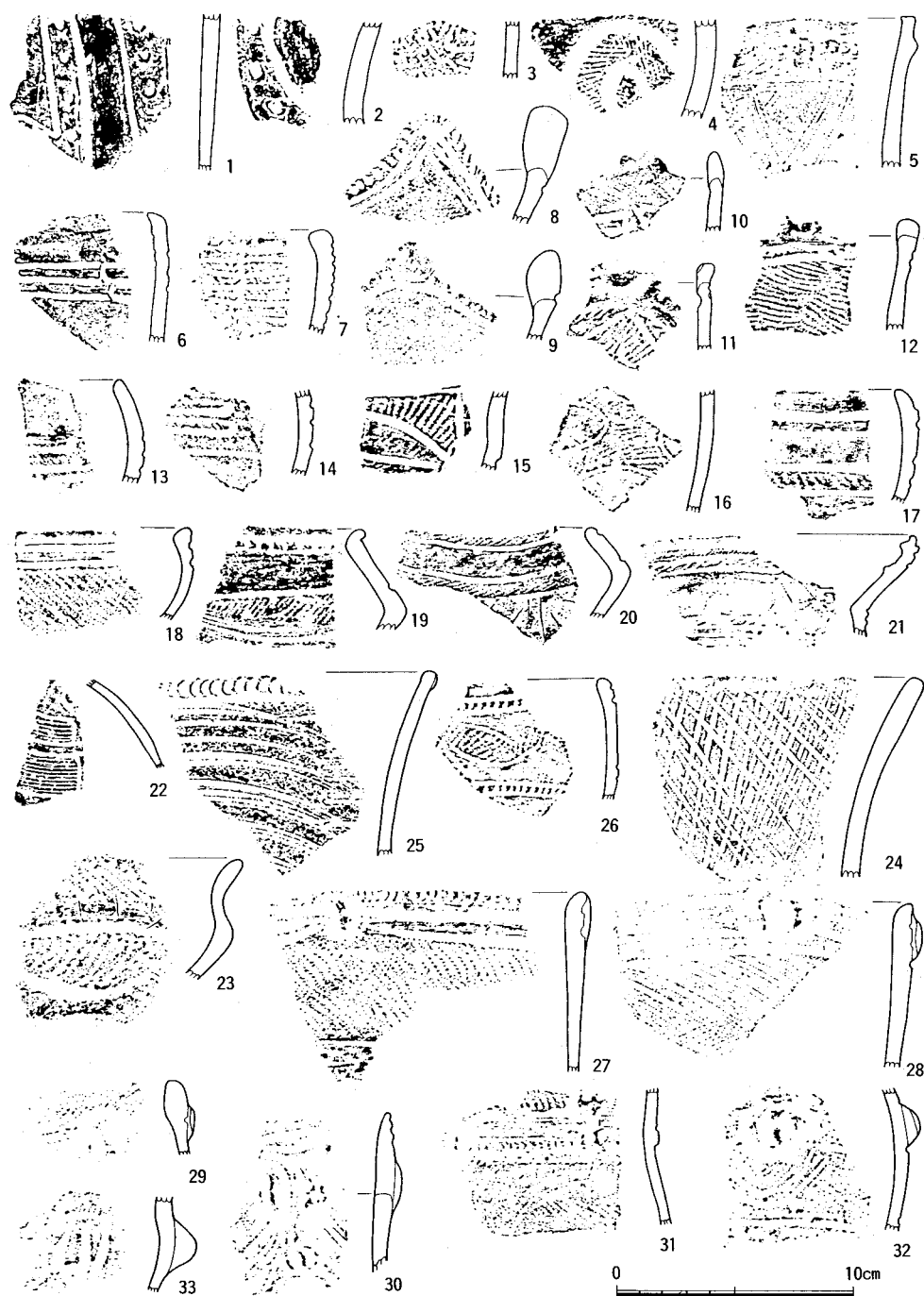


図32 縄文土器分析試料(1) 縮尺 1/3

土器の器種と胎土

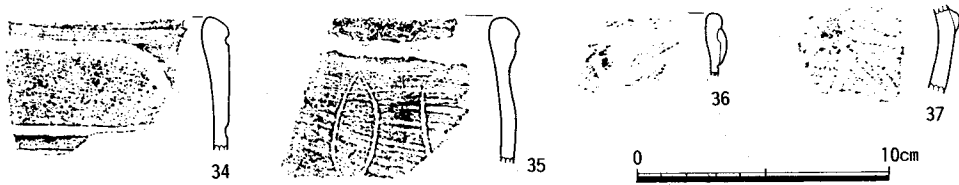


図33 縄文土器分析試料(2) 縮尺 1/3

跡の4住居址から出土した五領式と和泉式⁽¹¹⁾の土器を用いた(表3~5)。

表に示した器種名は、それぞれの資料が報告された『千葉県文化財センター研究紀要』⁽¹²⁾8と『八戸市博物館研究紀要』第2号⁽¹³⁾の用語に従っており、その出典の資料番号もあわせて付している。また図32~40は、これらの報告に掲載された図を使用させていただいたが、一部に縮尺を変えたものがある。

5 胎土の砂含有率

縄文土器から土師器にわたる3群の土器、計126点の砂の含有率を表3~5に示した。この含有率は前述したように、砂と認められるもののうち0.3m以上のものを選択した数

表4 縄文晩期終末~弥生前期の土器(青森県八戸市是川中居遺跡)

試料番号	原典図番号	器種	砂含有率(%)	試料番号	原典図番号	器種	砂含有率(%)
1	第3図5	浅鉢	11.2	24	第9図2	〃	10.2
2	第3図11	〃	9.8	25	第10図10	〃	15.8
3	第3図16	〃	0.8	26	第9図1	〃	6.0
4	第3図20	〃	2.0	27	第10図22	〃	12.0
5	第4図4	〃	2.0	28	第11図1A	甕	19.8
6	第4図3	〃	15.8	29	第11図4A	〃	11.8
7	第4図17	壺	6.8	30	第11図1B	〃	20.6
8	第4図8	浅鉢	1.0	31	第11図3C	〃	25.6
9	第5図6	壺(大型)	8.8	32	第11図2	〃	15.0
10	第5図7	〃	10.0	33	第11図8A	〃	14.0
11	第5図8	〃	9.6	34	第11図11	〃	21.8
12	第5図10	〃	14.0	35	第11図15	〃	20.8
13	第4図18	〃	1.4	36	第11図17	〃	22.0
14	第6図	〃	11.6	37	第12図1	〃	11.4
15	第5図14	〃	14.6	38	第12図2A	〃	15.6
16	第5図18	〃	1.6	39	第12図7	〃	6.2
17	第7図1B	鉢・深鉢	15.2	40	第12図8	〃	10.6
18	第7図7	〃	7.2	41	第12図9	〃	18.6
19	第7図16	〃	15.2	42	第11図16	〃	17.4
20	第7図18	〃	12.4	43	第13図4	〃	10.8
21	第7図20	〃	4.6	44	第12図13	〃	5.6
22	第7図21	〃	4.4	45	第12図15	〃	12.2
23	第8図12	〃	8.0	46	第13図1	〃	11.8

胎土の砂含有率

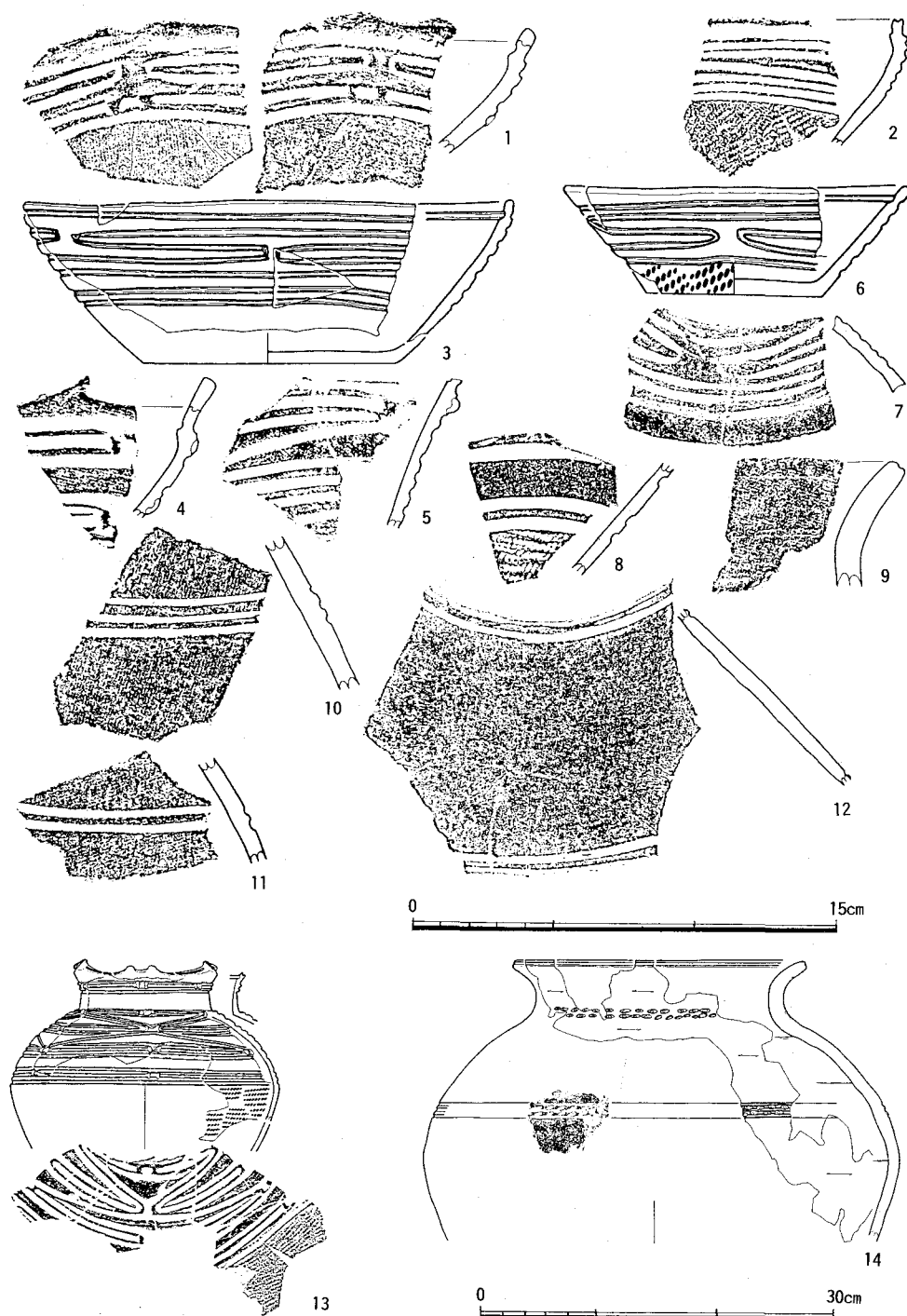


図34 縄文晩期終末～弥生前期の土器分析試料(1) 縮尺 2/5 (1～12), 1/6 (13・14)

土器の器種と胎土

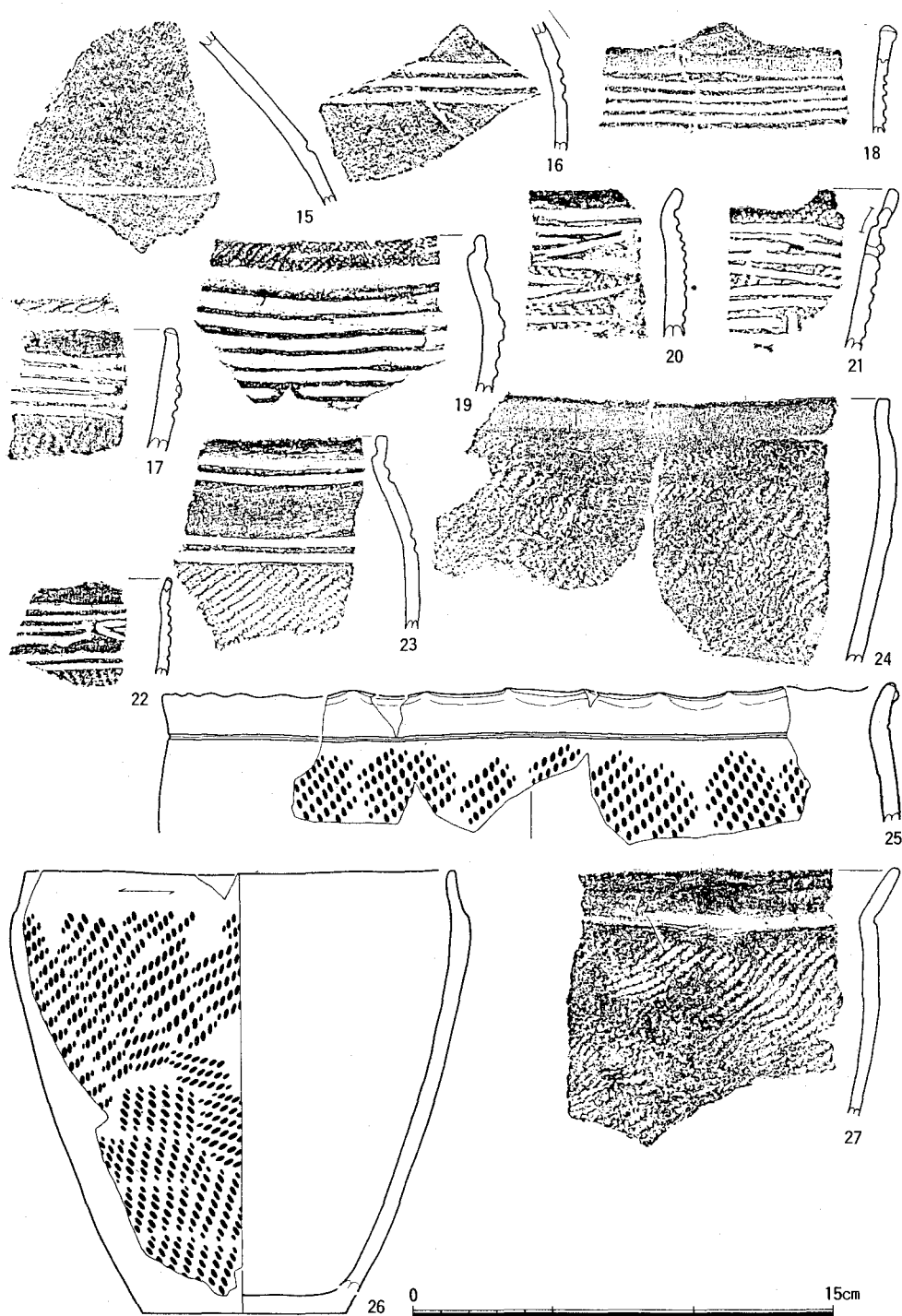


図35 縄文晩期終末～弥生前期の土器分析試料(2) 縮尺 2/5

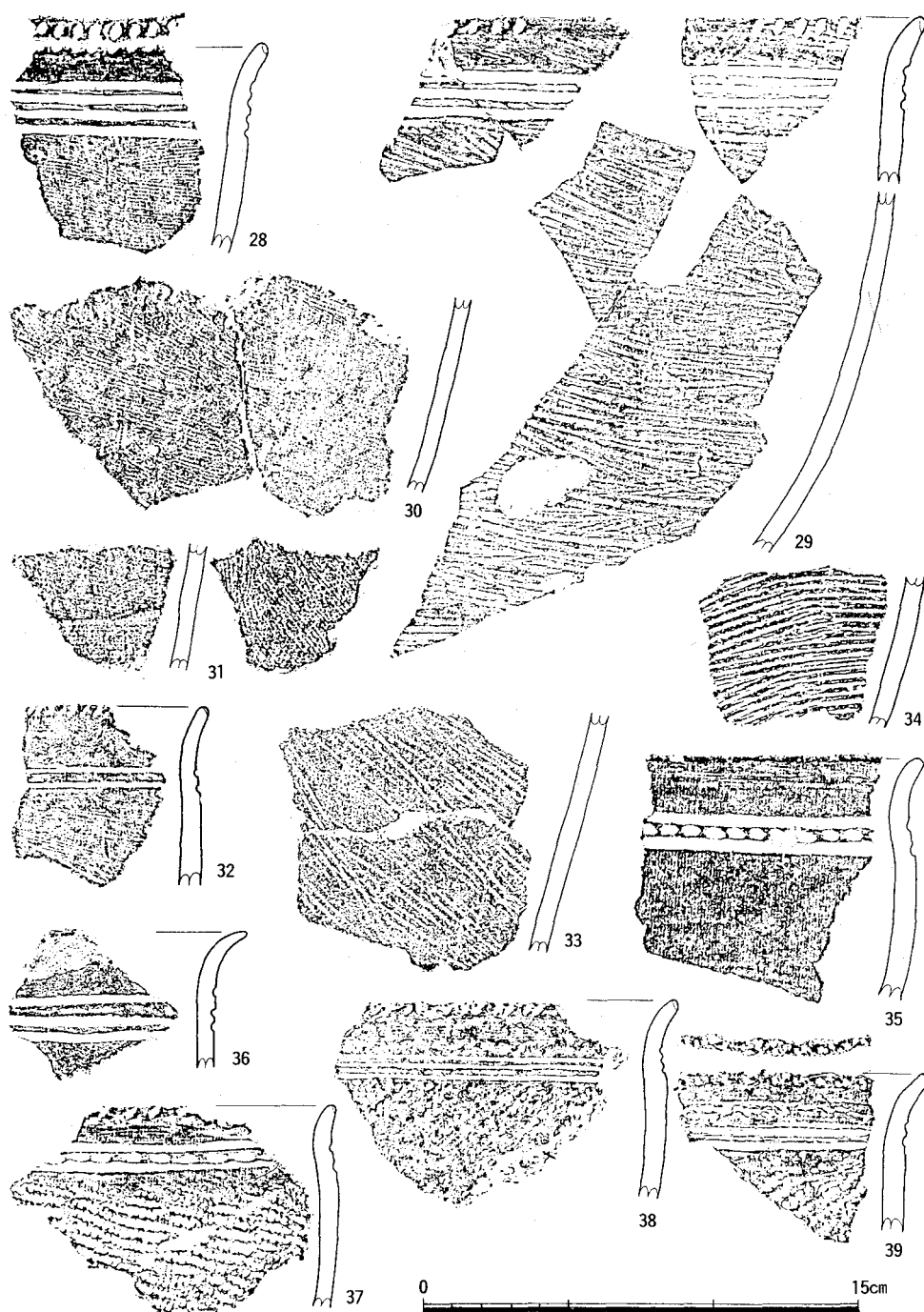


図36 縄文晩期終末～弥生前期の土器分析試料(3) 縮尺 2/5

土器の器種と胎土

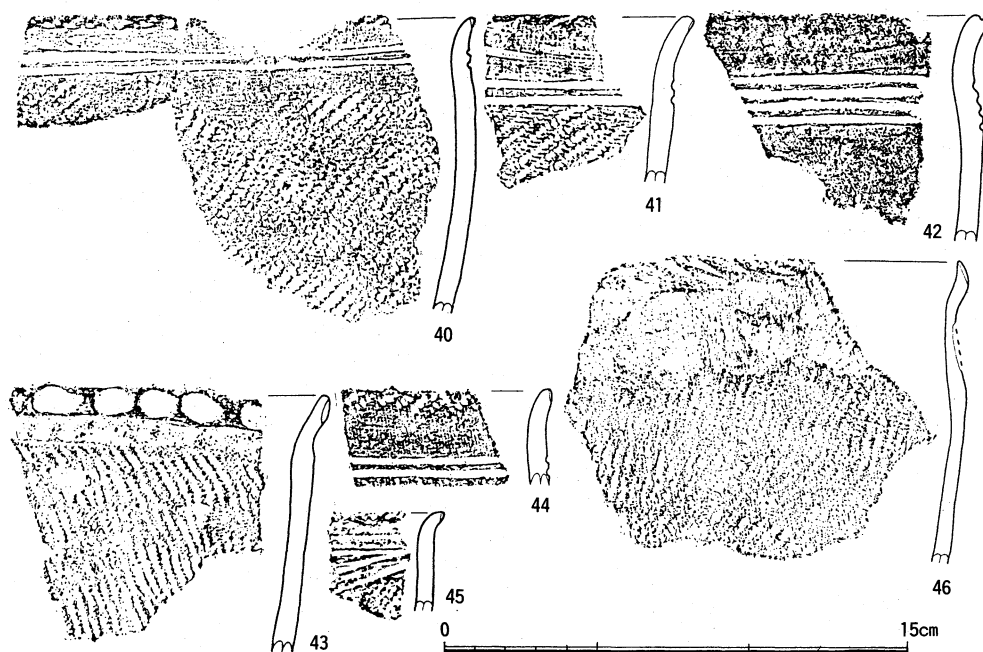


図37 縄文晩期終末～弥生前期の土器分析試料(4) 縮尺 2/5

表 5 土師器 (千葉県市原市番台遺跡)

試料 番号	原典図 番号	時期	出土地点	器種	砂含有 率(%)	試料 番号	原典図 番号	時期	出土地点	器種	砂含有 率(%)
1	102	五領式	077A号 住居跡	甕	13.0	23	126	和泉式	019号 住居跡	高杯	2.1
2	101	〃	〃	埴	0.4	24	127	〃	〃	高杯	2.0
3	103	〃	〃	高杯	1.1	25	129	〃	〃	壺	5.3
4	105	〃	〃	高杯	1.6	26	123	〃	〃	埴	0.3
5	104	〃	〃	器台	7.0	27	125	〃	〃	埴	0.7
6	106	〃	〃	壺	0.4	28	124	〃	〃	埴	0.3
7	107	〃	〃	甕	15.4	29	128	〃	〃	高杯	2.3
8	108	〃	〃	甕	13.4	30	130	〃	〃	壺	3.4
9	109	〃	〃	甕	13.0	31	131	〃	〃	壺	7.6
10	110	〃	〃	甕	11.3	32	132	〃	〃	甕	11.0
11	111	〃	029E号 住居跡	埴	1.7	33	133	〃	026号 住居跡	埴	0
12	112	〃	〃	埴	5.6	34	134	〃	〃	埴	0
13	113	〃	〃	高杯	4.2	35	135	〃	〃	椀	8.3
14	114	〃	〃	高杯	2.9	36	136	〃	〃	椀	0.1
15	115	〃	〃	高杯	3.1	37	140	〃	〃	壺	4.0
16	116	〃	〃	高杯	0.7	38	139	〃	〃	壺	13.1
17	117	〃	〃	壺	0.3	39	137	〃	〃	高杯	0.3
18	118	〃	〃	壺	5.4	40	138	〃	〃	高杯	0.1
19	119	〃	〃	甕	20.3	41	142	〃	〃	甕	8.1
20	120	〃	〃	甕	22.0	42	141	〃	〃	甕	11.9
21	121	〃	〃	甕	2.6	43	143	〃	〃	甕	5.6
22	122	〃	〃	甕	16.1						

胎土の砂含有率

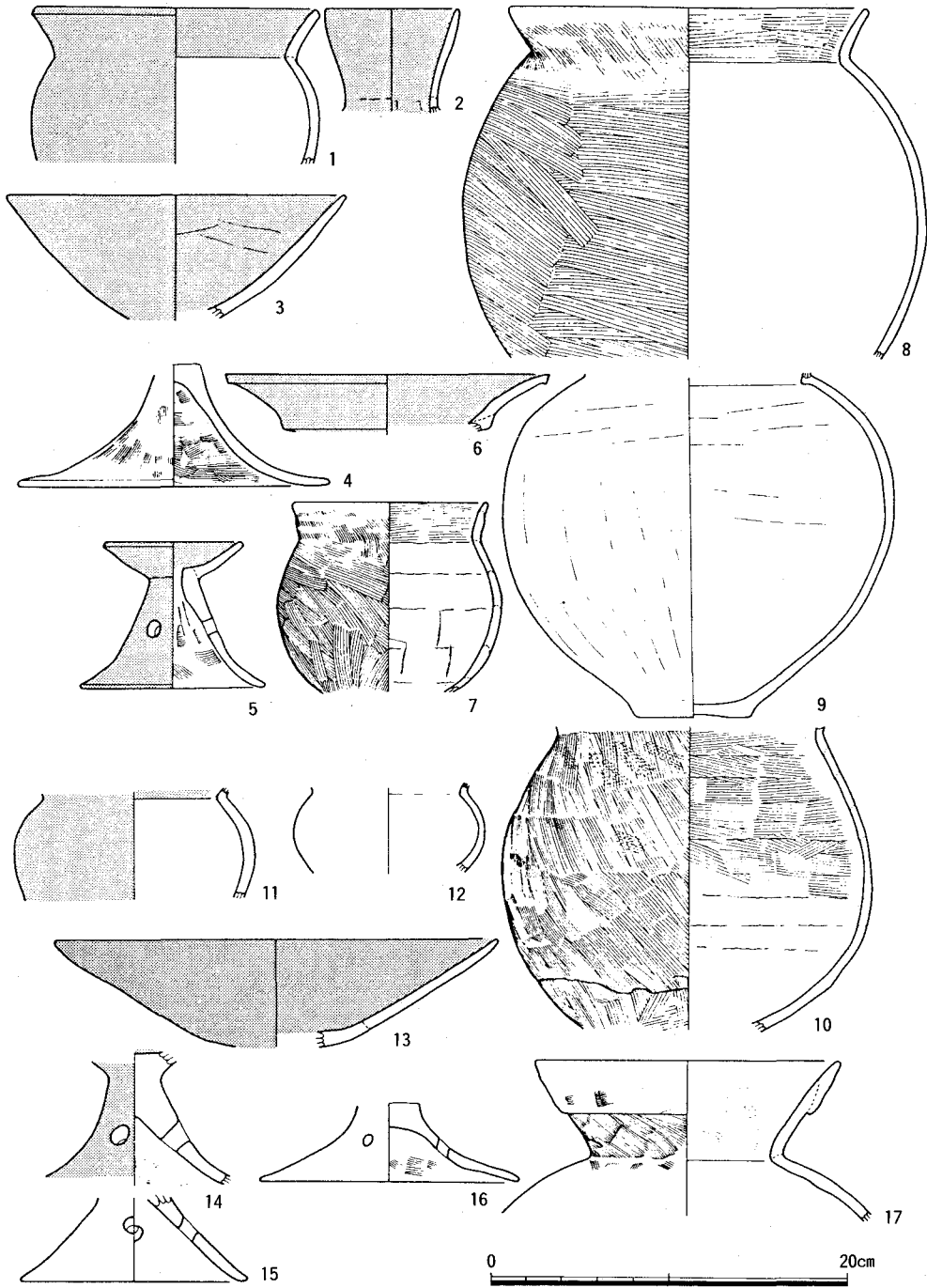


図38 土師器分析試料(1) 縮尺 1/4 (梨地部分は赤彩)

土器の器種と胎土

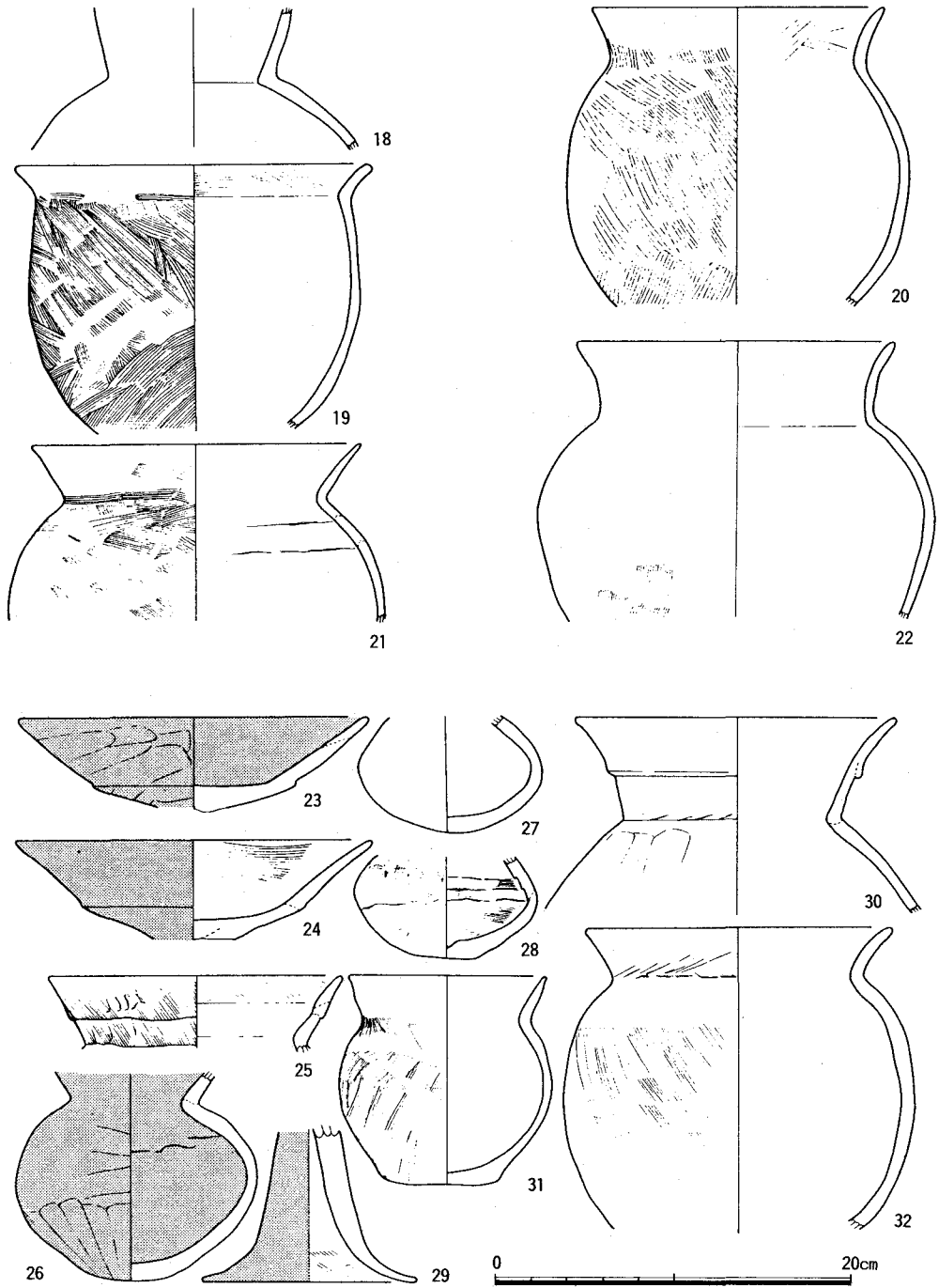


図39 土師器分析試料(2) 縮尺 1/4 (梨地部分は赤彩)

器種別含有率の分布

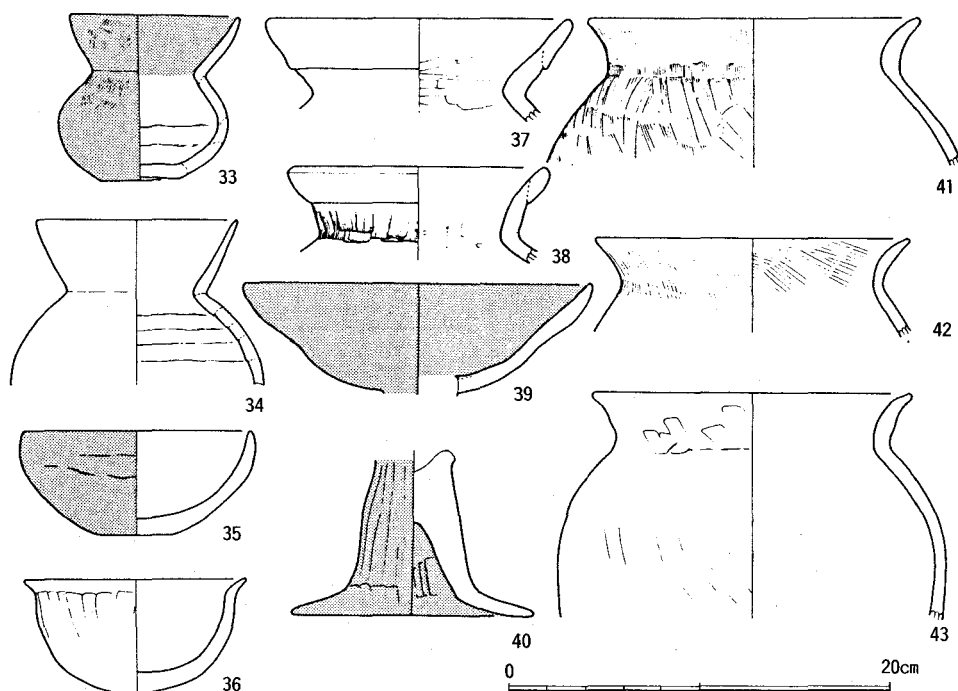


図40 土師器分析試料(3) 縮尺 1/4 (梨地部分は赤彩)

あり、胎土に含まれる砂の全体ではない。したがって微粒の砂を含めた全体の含有率よりも数値は低い。大半の土器は20%未満で、いずれの土器をとり上げても共通しているが、20%を越える土器もいくつかみられる。これらはいずれも甕で肉眼的にはきわめて粗放な胎土という特徴をもつ。逆に砂含有率が0%の土師器の33・34は、胎土に砂が全く混在していないことではない。いずれも0.3mmを越える砂が部分的に1~2点含まれるが、胎土全体を代表する部分の方の数値を選択しているためである。他の測定値についても同様で、任意に選んだ測定箇所到大粒径の砂が存在する場合30~50%に近い値をとることもあるが、これは胎土全体を代表するものではないため、複数の測定範囲内での平均的な値と判断できる数値の方を採用している。また、5%未満の土器の個体数をみると、縄文土器では2点で全体個数の5%、縄文晩期終末~弥生土器では8点で17%、土師器では24点で55%と徐々に増加し、土師器で急増する。この現象は明らかに素地の選択があったことを示しているが、これに関係する要因を検討してみることにする。

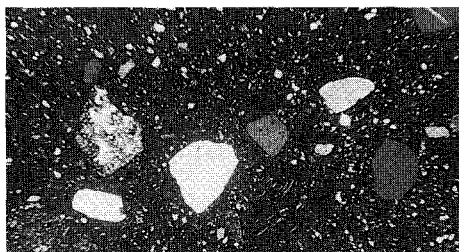
6 器種別含有率の分布

各時期の3群の土器を器種と器形の大小との要素で2分して、胎土の砂含有率をもとに

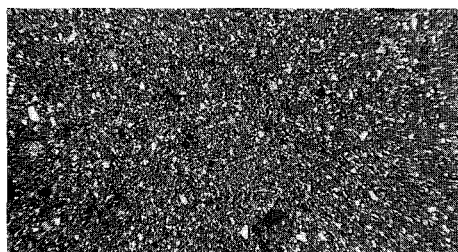
素地選択の具体的な背景の復原を試みた。縄文土器では浅鉢、注口と鉢、深鉢に、縄文晩期終末期～弥生前期の土器では浅鉢、壺と鉢、深鉢、甕、大形壺に、土師器は碗、壺、埴、高杯と甕に2分した。これらの器種の中には、浅鉢が煮沸用に使用された痕跡をもつものもあり、また壺と大型壺をどこで区分するかなどいくつか問題は残るが、用途や製作技術の差と材質との関係について一般的な傾向を把握するための手段として一律に区分した。これにしたがって砂の含有率を整理したのが図42である。含有率を5%単位に分けて、それぞれに該当する土器の個数を積算して棒グラフで示したものである。その結果、縄文土器、縄文晩期終末～弥生前期の土器、土師器の土器群は次のような傾向をもつことが明らかになった。

縄文土器 千葉県佐倉市飯合作遺跡出土の土器37点の胎土に含まれる0.3mm以上の砂の含有率は、最低含有率4.6%から最高の18.1%の幅をもつ(表3)。これを5%単位の幅でそれぞれ該当する土器の個数をみると、その多くは5～14.9%の間に集中する。これを浅鉢、注口土器と鉢、深鉢の2種類の器種に分けて比較してみると、鉢、深鉢は10～14.9%の土器が最も多く、5～9.9%がこれにすぎそれらの前後の値の土器は少数である。つまり10～14.9%を中心として5～14.9%の間に集中する。これに対して浅鉢、注口土器は、一定の含有率の集中はみられない。

縄文晩期終末～弥生前期の土器 是川中居遺跡で共伴出土した縄文晩期の大洞A'式土器と弥生前期の砂沢式および遠賀川系土器についてみると、図42下左のような分布を示す。鉢、深鉢、甕、大型壺は、縄文土器と同様に10～14.9%の含有率の土器が多数を占めて、その前後の値をとるものは次第に少数となり、ほぼ正規分布に近い状況が見られる。一方、浅鉢と壺の分布はこれとは非常に異なっている。縄文土器の浅鉢、注口土器でみた含有率と比較してさらに数値の小さい土器が多数を占め、含有率が高くなるほど少数とな



甕：試料20，砂含有率22%



埴：試料33，砂含有率0%

図41 土師器の胎土

器種別含有率の分布

る傾向がみられ、鉢、深鉢、甕、大型壺の一群の器種との差がはっきりとあらわれている。

土師器 縄文晩期終末～弥生前期の土器でみられた、器種および土器の大小による砂含有率の差の傾向は、土師器では一段と明瞭になる。千葉県市原市番後台遺跡の五領式と和泉式の土器43点を分析したのが図42下右である。甕は10～14.9%の含有率をもつ土器が多数を占めて、その前後の含有率の土器は次第に少数となる。これは前述の縄文土器の鉢、深鉢および縄文晩期終末～弥生前期の鉢、深鉢、甕、大型壺のいずれとも同様の傾向である。これに対して碗、壺、埴、高杯の胎土の砂の含有率をみると0～4.9%が圧倒的に多数

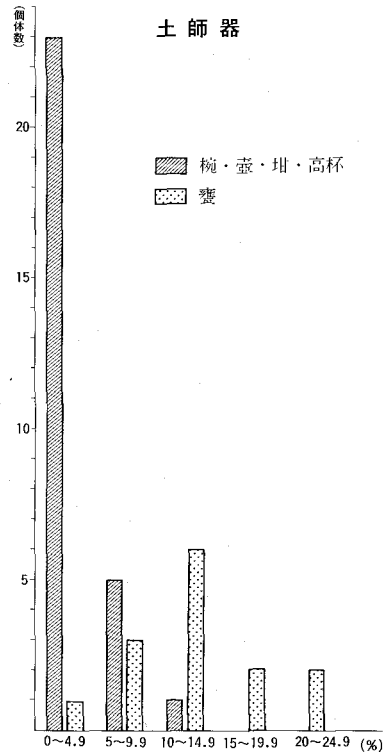
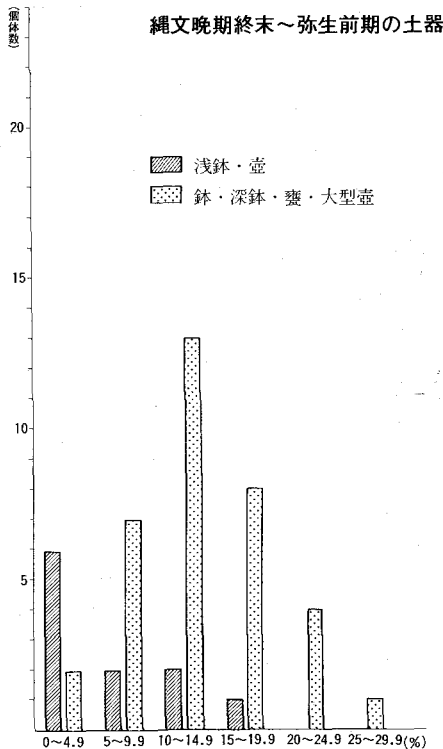
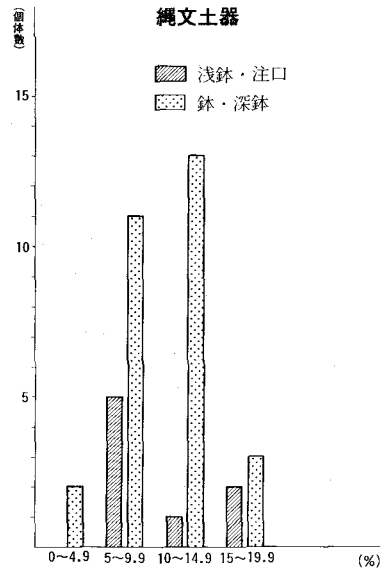


図42 器種別砂含有率の分布

を占め、5～9.9%、10～14.9%へと次第に少数となり、甕の含有率の分布とは著しい差をしめしている(図41)。この両器種群にみられる砂の含有率の違いは明らかに土器製作にあたって素地の選択がなされたことをものがたっている。

以上のような、器種と器形の大小という2つの要素を前提において材質との関係をみると次のような点を把握することができる。

(1) 緻密な胎土をもつ土器の増加は土師器において顕著にみられ、その傾向は、縄文晩期終末～弥生前期の土器の中にあらわれはじめる。

(2) 煮沸用に重きをおく器種と大形品の胎土の材質をみると、個体数の上で砂の含有量が10～14.9%の土器を中心に、その前後の値をもつ土器は減少している点で、3群の土器をとおしてほぼ同様の傾向を示している。

(3) 緻密な胎土をもつ土器の増加は、縄文晩期終末～弥生前期の土器では浅鉢と壺に、土師器では椀、壺、埴、高杯といった煮沸用や大形品以外の土器の材質に深くかかわって生じた現象である。

このように縄文土器では用途や機能による器種の分化が生じているもののこれと関連した材質の選択は明瞭でない。土器の発生後まもなくスリップや彩文を施したり、胎土の差が表れる西アジアなどの土器と大きく異なっている。おそらく農耕生活に基盤をおく社会と食糧採集社会との間で日常生活における土器の占める役割の差が反映している結果であろう。縄文土器の中にも材質選択の意図が明確なものは、東日本の縄文晩期の土器の一部にある。精巧な装飾をもち、丁寧な調整が施された外観上きわめて良質の土器では、胎土も精緻なものが多く、日常の容器とは異なる特殊な土器として製作時から意図したものにみられる現象である。その後の土器に表れる材質に対する意識は、こうした特殊な意図のもとに作られた土器を契機とし、一般の土器に対しても徐々に及んでいったものと考えられる。是川中居遺跡の縄文晩期終末～弥生前期の土器では、浅鉢、壺の材質が鉢、深鉢、甕、大型壺と比べて精緻な胎土のものの比率が高まり、材質を選択した意図がみられるが、それらの土器は遠賀川系土器を除くと亀ヶ岡式土器の伝統をひく土器であり、東日本の晩期の土器の一部の現象として著しく表れた傾向であるかもしれないが、いずれにしても、その後の土器の材質の大きな変化流れの端緒をこれらの土器の胎土に見出すことができる。

その変化の結果を顕著に示しているのが、千葉県番後台遺跡の土師器の椀・壺・埴・高杯の胎土であり、土器製作の上で材質を選択することが、比較的一般的になっていること

を知ることができる。それは弥生時代の土器の器種分化が著しく発達する中で、用途や製作技術と深く関わり合いながら材質の選択が徐々に浸透していったものと考えられる。その具体的な背景や変化の時期細分は、この問題に適合した土器資料を多数分析することによってさらに明らかになるであろうが、ここで示した結果は、日本の土器の歴史の中で生じた材質に関する大きな流れの変換点の一部を表しているものといえよう。

この小論を作成するにあたって土器図面掲載を快諾いただいた千葉県教育庁文化課・沼沢豊氏、『千葉県文化財センター研究紀要』8の編集・執筆にあたえられた諸氏と工藤竹久氏、高島芳弘氏、および是川中居遺跡出土の土器分析の機会を与えていただいた佐原眞氏と工楽善通氏に対して末筆ながらお礼申し上げる次第である。なお、この研究は平成3年度文部省科学研究費補助金交付による一般研究(C)「自然科学的分析による土器の材質および製作技術の復原的研究」の成果の一部である。

〔注〕

- (1) 佐原眞「土器の話」(1~13)『考古学研究』第16巻4号~第21巻2号 1970~1974年
- (2) 西田泰民「土器録」(1)~(12)『東京の遺跡』No. 11~24 1986~1989年
- (3) 小林行雄「すいひ」「はじき」『図解考古学辞典』p. 506, pp. 802, 803 1969年
- (4) 西田泰民「精製土器と粗製土器—胎土からの検討—」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第3号 pp. 1-25 1984年
- (5) 佐原眞「土器の用途と製作」『日本考古学を学ぶ』(2) pp. 40-60 1979年
- (6) 平賀章三「素地作製の技法解明」『奈良教育大学紀要』第27巻第2号(自然) pp. 99-113 1978年
- (7) 西田泰民「精製土器と粗製土器」(前掲)
- (8) この数値は土壌分類学の区分のうち国際法によるものである。同じ土壌分類でも国によっても若干の差がみられ、また岩石学でいう砂岩の粒子区分では、0.06~2 mm のものをさすが、ここでは粘土やシルトとの共存堆積物の砂という点から、土壌の分類値を示した。
- (9) 田中憲一・片田正人「カラーインデックス」『地質調査所月報』第17巻第5号 p. 130 1966年
- (10) 実際の測定では、視野の中心点を印したレンズと土器のプレパラートが前後左右に一定の間隔で自動的に移動する装置を用いておこない、中心点の位置にあたるのが砂粒であるか否かの区分をする方法をとった。
- (11) ここでは、土器の用途や製作技術と胎土の材質との関係を把えることが目的であるために、分析した土器には装飾を意図したであろう黒雲母などの混和材を多量に含むものは加えていない。
- (12) 千葉県文化財センター編『千葉県文化財センター研究紀要』8 pp. 73-74, 77-78 1984年
- (13) 工藤竹久・高島芳弘「是川中居遺跡出土の縄文晩期終末期から弥生時代の土器」『八戸市博物館研究紀要』第2号 pp. 1-31 1986年